

## 促成イチゴの夏期低温短日処理育苗による前進出荷栽培

第1報 採苗方法及び育苗期間の違いが低温短日処理後の発育に及ぼす影響  
松尾孝則・田中龍臣 (佐賀県農業試験場)

Takanori MATSUO and Tatsuomi TANAKA : Early Harvesting Culture of Strawberry  
by Low Temperature and Short Day Treatment in Summer

1. Effect of Raising Method and Culturing Duration of Daughter Plants  
on the Plant Growth after Treatment

促成イチゴ栽培では前進出荷のため花芽分化の早進化を目的として、いくつかの低温処理育苗法が開発されている。この内、短日と夜間(暗期)の低温とを組合せた夜冷短日処理法による栽培技術を確認する一環として、育苗方法の違いが低温短日処理時の苗質や花芽分化及び定植後の発育、収量に及ぼす影響について検討した。

## 1. 試験方法

‘とよのか’を用い、鉢受け法と鉢上げ法とで育苗した。供試した子株は、低温短日処理開始までの育苗日数が95日、85日、75日、65日及び55日となるよう、1988年5月9日から6月18日までの間に採苗した。鉢受け法は3月中旬定植した親株から、本葉1.5~2.0枚で12cmポットに誘引し、7月4日親株から切り離した。鉢上げ法は4月まで収穫をした株から本葉1.5~2.0枚で切り離し、バーライト床で発根させ1週間後にポットに鉢上げした。

低温短日処理は8月11日~9月1日の21日間行い、8時間日長で暗期の温度を15℃とした。明期は自然光を寒冷紗で遮光し気温の制御は行わなかった。処理終了後直ちに定植した。

## 2. 結果及び考察

低温短日処理前の苗質は、根量に差が認められ、育苗期間が長いほど根部の割合が高かった。また採苗法では

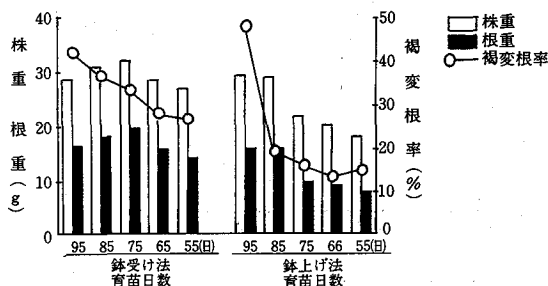
鉢受け法の根量が多かった。褐変根率は育苗期間が長いほど高く、鉢受け法が鉢上げ法より高かった。

処理終了時の根部呼吸量は、育苗期間が長いほど少なかった。花芽分化指数は、鉢受け法、鉢上げ法とも75日以上の苗が2(花房分化期)以上と高かった。

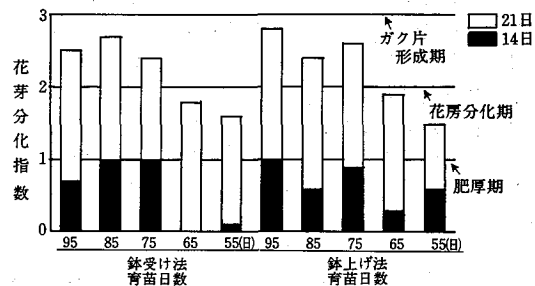
定植後の生育、第1花房の出蕾開花の早晚、第1、2花房の花数のいずれも鉢受け法の95日、85日苗と鉢上げ法の55日苗が劣った。

年内収量は出蕾開花時期の早晚、花数の多少と同様に鉢受け法の95日、85日苗、鉢上げ法の55日苗が他の区より少なかった。

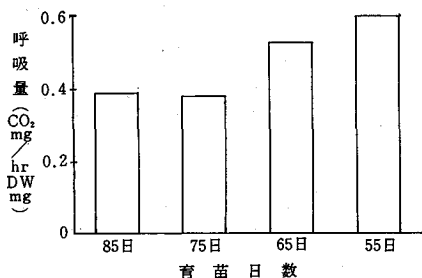
以上の結果より、花芽分化の難易には育苗日数が関与し、低温短日処理開始時までの育苗期間が75日以上あれば花芽分化しやすいといえる。しかし花芽分化が早かった区が逆に出蕾開花が遅く収量も少なかった。またこれらの区は褐変根率が高いか、根量の少ない苗であった。これは花芽の発育が定植後の株の活力に左右され、それは苗の時期の根の活力が関与しているものと思われる。よって‘とよのか’では夜冷短日処理用の苗の処理までの育苗期間は鉢受け法の場合75~55日、鉢上げ法では95~65日が適当であると考えられる。



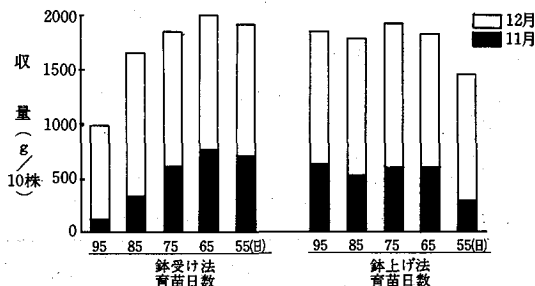
第1図 育苗方法の違いによる低温短日処理終了時の苗質



第3図 育苗方法の違いによる低温短日処理効果



第2図 育苗方法の違いと根部呼吸量



第4図 育苗方法の違いと年内商品果収量